社会的に注目されている児童・生徒のパーソナリティ特性の 認知に関する一研究

— エゴグラムを手がかりにした大人の認知的差異を中心に —

鉤 治 雄* 竹 間 進**

A Study on Cognition of Personality Traits of Pupils Attracting Social Concerns
— Cognitive Difference of Egograms of Pupils Perceived by Adults —

Haruo MAGARI and Susumu CHIKUMA

The purpose of the present study was to clarify the cognition of personality traits of pupils attracting attention in the society. In this study, the personality traits of pupils attracting social concerns were investigated with egograms perceived by adults. Subjects were 205 correspondence course students in the university (62 male, 143 female). The main results were as follows: (1) Adults perceived underachievers as a tendency to have high scores at "FC (Free Child)" levels and low scores at "A (Adult)" levels. On the other hand, adults perceived overachievers as a tendency to have high scores at "A", "CP (Critical Parent)", and "AC (Adapted Child)" levels. (2) Violent pupils were commonly perceived as a tendency to have high "CP" and "FC" states among adults. On the contrary, the results showed rather high ego states towards nonviolence pupils at "AC", "A" and "NP (Nurturing Parent)" scales. (3) As a result of the comparison between nonattendance pupils and attendance pupils, there was cognitive discrepancy between them: namely, "FC" and "NP" scores of attendance pupils were higher than those of nonattendance pupils. (4) Moreover, cognitive discrepancies between bullying pupils and sympathetic pupils were significant. "NP", "A", and "AC" scores of bullies were lower than those of sympathetic pupils. As a whole, it was indicated that adults had negative images towards problem behaviors of pupils.

key words: personality traits of pupils, egograms, cognitive difference

問題と目的

学業不振や暴力、不登校やいじめなど、社会的に注目されている児童・生徒のパーソナリティ特性の理解に際して、児童・生徒の自己評定や生徒間相互の評定、あるいは、事例観察を手がかりにした研究は多い。

たとえば、サバージ (Savage, R. D., 1966¹⁴⁾) やアイゼンクとクックソン (Eysenck, H. J. & Cookson, D., 1969²⁾)、鉤 (1979⁶⁾, 1981⁷⁾) は、学業不振児や優秀児の性格特性、達成動機、学級内の社会的地位などの諸特性について、児童・生徒の自己評定に基づいた分析を試みている。また、鉤 (1984⁸⁾, 1985⁹⁾) は、親を殴るなどの暴力行為に及んだ児童・生徒の

* 創価大学教育学部
Faculty of Education, Soka University

** 創価大学大学院
Graduate School of Soka University

人格特性について、児童・生徒間相互の客観的評定を手がかりにして検討を行っている。さらに、田畑(1981¹⁷⁾)やオルヴェウス(Olweus, D., 1993¹²⁾)は、事例研究の上から、いじめ行為に及んだ児童・生徒のパーソナリティ特性について分析し、同様に、クーリッジ(Coolidge, J. C., 1964¹¹⁾)や平井(1979⁴⁾)、詫摩(1980¹⁸⁾)は、ケース研究の上から、不登校児の人格特性を中心に考察をおこなっている。

これに対して、リード(Reid, K., 1983¹³⁾)や白井(1992¹⁶⁾)、文部省(1993¹¹⁾)は、不登校児のイメージや不登校の原因認知に関して、一歩踏み込んで、教師や親、青年など、大人の側の認知の問題を取り扱っているが、こうした研究は、周辺の大人たちが、昨今の児童・生徒の行動傾向をどのように認知しているかという点に言及したものであり、児童・生徒の存在を、より全体的な視点から理解していく上で示唆に富むものである。

しかしながら、これらの一連の研究は、不登校という特定の児童・生徒行動に対する大人の側の認知に言及してはいるものの、学業不振児や暴力児、いじめっ子といった、その他の社会的に注目されている児童・生徒行動に対する大人の側の認知の問題を取り扱っている訳ではない。ましてや、学業不振児と学業優秀児、不登校児と登校児といった、いわゆる児童・生徒のネガティブな行動とポジティブな行動とのあいだの大人の認知的な差異について明らかにしている訳ではない。

児童・生徒を教育する上において、重要他者である大人にとって不可欠なのは、こうした一連の児童・生徒行動に対する大人自身の認知傾向に目を向けることであり、とりわけ、児童・生徒のネガティブな行動とポジティブな行動とのあいだの大人自身の認知的な差異について、気づきを深めていくことであろう。

学業不振児と学業優秀児とでは、パーソナリティ特性の面でどのような違いがあると大人は認知しているのか、あるいはまた、不登校児と登校児、暴力児と暴力抑制児とでは、どのような点で異なると認知しているかなど、さまざまな児童・生徒行動相互の大人の側の認知的差異を明らかにしていくことは、児童・生徒を正しく理解し、適切なかかわりを維持していく上で、重要であると考えられる。

そこで、本研究では、自我構造やパーソナリティ

特性を把握する上で有効である交流分析のエゴグラムを活用することにより、社会からみて関心の高い学業不振児と学業優秀児、暴力児と暴力抑制児、不登校児と登校児、いじめっ子と思いやりのある子という計4対の行動傾向に対する大人の側の認知的差異を明らかにしようとした^{注1)}。

加えて、学業不振児と不登校児、暴力抑制児と登校児というように、複数のネガティブな行動、もしくはポジティブな児童・生徒行動間の大人の認知傾向の関連性についても分析を試みた。あわせて、いじめ・不登校に対する大人の認知と現在の大人の自己イメージとの関連について、過去における大人自身の不登校経験やいじめられ経験の有無を手がかりにして検討をおこなった。

その際、多くの心理的尺度の中でも、エゴグラムを使用したのは、①交流分析の自我構造理論が、簡潔かつ平易な言葉で表現されており、調査対象となった一般成人にとって、きわめて理解しやすい内容である、②元来、集団療法の中で生まれ、成員相互のパーソナリティ構造に気づきを深める上で優れた手法であり、その意味では、児童・生徒のパーソナリティ特性を大人が認知し、イメージする上で適切な尺度である、と考えられたからである。

ともあれ、一定の心理尺度を手がかりにして、さまざまな児童・生徒行動に対する大人の認知傾向について検討し、分析を試みることは、大人自身が自己への気づきを深め、児童・生徒の成長を適切に援助していく上で、重要であると考えられる。

方 法

調査対象：S大学の法学、経済学、教育学を専攻する通信教育生、男子62名、女子143名、計205名を調査対象とした。年齢別内訳は、18～29才113名、30～45才63名、46才以上29名であった。通信教育に在籍する学生を調査対象としたのは、①年齢や職業、居住地が広範囲に及んでおり、対象に偏りがなく、児童・生徒行動に対する成人の側の認知傾向を把握する上で適切であること、②調査の事前段階において、スクリーニングを通して、交流分析におけるパーソナリティ構造論(エゴグラム)に

注1) 既に、藤田・川島(1995)の研究にもみられるように、エゴグラムは、人格特性の差異を比較検討する上で、簡便で利用価値が高く、有効であると考えられる。

ついて共通の理解と認識をはかることが可能であること、の2点の理由からであった。

質問紙の作成：児童・生徒行動に対する大人の認知傾向を把握するために、社会的に注目されている4つのネガティブな児童・生徒行動、およびそれらの行動とそれぞれ対をなすポジティブな行動の特徴を簡潔に表現した4対計8種類の項目を作成した。用意された8つの項目内容は、以下のとおりである。

(A1)「学習意欲に欠け、成績の振わない子(学業不振児)」, (A2)「学習意欲があり、成績の優れている子(学業優秀児)」, (B1)「腹の立つことがあって、先生に暴力を振ったり学校の物を壊したりする子(暴力児)」, (B2)「腹の立つことがあっても、暴力に訴えることを我慢できる子(暴力抑制児)」, (C1)「友だち関係が原因で、いつも学校を休みがちな子(不登校児)」, (C2)「いつも明るく元気に登校する子(登校児)」, (D1)「学校でいつも特定の子をいじめている子(いじめっ子)」, (D2)「いつも友だち思いの優しい子(思いやりのある子)」。

以上のエゴグラム描写に際しての項目に加えて、対象となった通信教育の学生の過去における不登校経験の有無、およびいじめられ経験の有無について、それぞれ2件法で回答を求めた。なお、これらの調査実施に先立って、後述するように、学生自身の自己評価によるエゴグラムを作成させた。

手続き：数日間に及んだスクーリングの最後の授業時に、通信教育の学生に対して、交流分析理論の意義や目的について説明がなされた。その後、新里ら(1986)が作成した全48項目から成るエゴグラム・チェック・リスト^{注2)}を学生に配布し、学生自身のパーソナリティについて、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で自己評価させた。続いて、エゴグラムを構成する「批判的親(Critical Parent: CP)」, 「養育的親(Nurturing Parent: NP)」, 「大人(Adult: A)」, 「自由な子ども(Free Child: FC)」, 「順応した子ども(Adapted Child: AC)」の、計5つの下位尺度について説明が加えられ、各自我状態の特徴を学生に習得させた。この間に要した時間は、およそ70分程度であった。

注2) 使用したエゴグラム・チェック・リストは、エゴグラム(5尺度計40項目)に、虚偽尺度(lie scale)8項目を加えた48項目で構成されている。

その後、前述の質問紙が配布され、4対計8種類の児童・生徒行動に対するイメージを、エゴグラムを用いて記入させた。エゴグラムは、目盛が刻まれたグラフ用紙に棒グラフで直観的に記入させた。各下位尺度とも、得点範囲(目盛の数)は、前述の自己評価の際に用いたエゴグラム・チェック・リストと同様、0~8点とした。

実施時期：1996年8月の夏期スクーリングと、同年10月の秋期スクーリングの計2回にわたって、筆者らによって実施された。

結 果

1. 児童・生徒のパーソナリティ特性に関する認知的差異

1) 学業不振児と学業優秀児

まず、学業不振児のエゴグラムは、FCの値($M=5.16$)が最も高く、Aの値($M=2.84$)が最も低いことから、大人は、学業不振児を、概して自由で衝動的傾向がみられる反面、冷静さや知性に欠ける存在として認知する傾向にある。ただ、学業不振児の場合には、全般的に、各尺度とも得点が低く、やや活力に欠けるイメージが強い(Table 1)。

これに対して、学業優秀児の場合には、全般的に各尺度得点が高く、活力ある存在として認知される傾向にある。とりわけ、A($M=6.43$)、CP($M=5.89$)、AC($M=5.63$)の3尺度で得点が高く、こうしたパターンから、大人は、優秀児を、知性や合理性、批判力に富む反面、親や教師などの周囲の期待に過剰に反応する傾向が強いと認知する傾向にある。これらのA、CP、ACの3尺度では、学業不振児と優秀児のあいだに顕著な差が認められ、優秀児の得点が不振児を有意に上回った(A: $t=24.59$, $p<.001$ CP: $t=10.83$, $p<.001$ AC: $t=11.15$, $p<.001$)。

2) 暴力児と暴力抑制児

暴力児では、CP($M=6.29$)とFC($M=6.43$)の値がきわめて高い反面、A($M=2.77$)やNP($M=2.96$)、AC($M=2.89$)の値が極端に低く、特徴的なエゴグラム・パターンが認められる。このことから、大人は、暴力児を批判的・支配的で、自己中心的・衝動的な傾向が強い反面、冷静さや知性、他者に対する優しさや配慮に欠ける存在であると認知する傾向にある。

Table 1 社会的に注目されている児童・生徒行動のイメージ

		CP	NP	A	FC	AC	
学業不振児	<i>M</i>	3.86	4.02	2.84	5.16	3.50	
	<i>SD</i>	(1.99)	(1.81)	(1.61)	(2.27)	(2.05)	
学業優秀児	<i>M</i>	5.89	5.00	6.43	4.67	5.63	
	<i>SD</i>	(1.81)	(1.72)	(1.35)	(1.84)	(1.82)	
	<i>t</i>	10.83***	5.65***	24.59***	2.43**	11.15***	
暴力児	<i>M</i>	6.29	2.96	2.77	6.43	2.89	
	<i>SD</i>	(1.97)	(1.65)	(1.86)	(1.82)	(1.89)	
暴力抑制児	<i>M</i>	4.43	5.98	6.10	3.86	6.50	
	<i>SD</i>	(1.79)	(1.58)	(1.52)	(1.66)	(1.49)	
	<i>t</i>	10.02***	19.04***	19.93***	14.94***	21.72***	
不登校児	<i>M</i>	3.75	4.63	3.98	3.89	4.95	
	<i>SD</i>	(2.13)	(1.85)	(1.76)	(1.95)	(2.24)	
登校児	<i>M</i>	5.31	6.31	5.44	6.53	5.26	
	<i>SD</i>	(1.82)	(1.32)	(1.67)	(1.42)	(1.69)	
	<i>t</i>	8.03***	10.61***	8.63***	15.75***	1.62	
いじめっ子	<i>M</i>	6.51	2.68	3.03	5.79	3.19	
	<i>SD</i>	(1.88)	(1.47)	(1.74)	(2.03)	(2.12)	
思いやりのある子	<i>M</i>	4.44	7.30	5.79	4.98	6.68	
	<i>SD</i>	(1.81)	(0.94)	(1.49)	(1.84)	(1.55)	
	<i>t</i>	11.36***	38.09***	17.23***	4.24***	19.01***	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

これに対して、暴力抑制児の場合には、AC ($M = 6.50$) に次いで、A ($M = 6.10$)、NP ($M = 5.98$) の値が高い。これらの結果から、大人は、全般的に、暴力抑制児を、他者への配慮、冷静さ、優しさを兼ね備える存在として認知する傾向にある。

暴力児と暴力抑制児のエゴグラム・パターンは、 t 検定の結果、いずれの尺度においても有意差が認められ、各下位尺度の得点差がきわめて大きいことから、大人は、暴力児のエゴグラムを、暴力抑制児と正反対に近いパターンとして認知する傾向にあることが示唆された。

3) 不登校児と登校児

大人が認知する不登校児のイメージは、全般的に、各尺度得点の平均が4.0前後に集中し、均一化されたエゴグラム・パターンとなっている。ACの値 ($M = 4.95$) がわずかに高いものの、各尺度間に差はほとんど認められない。こうした結果から、大人は、不登校児を自己主張・自主性に乏しく、消極的で存在感が希薄であると認知する傾向にある。

これに対して、登校児では、全般的に、各尺度と

も得点が高く、FC ($M = 6.53$) とNP ($M = 6.31$) の両尺度得点を中心に、「M型」のエゴグラム・パターンが得られた。すなわち、大人は、登校児を自由闊達で優しさがあ、適応力のある存在として認知する傾向にある。

不登校児と登校児のエゴグラム・パターンは、 t 検定の結果、ACを除いた他の4尺度において有意差が認められたが、とりわけ、FCとNPの2尺度において顕著な差が認められた (FC: $t = 15.75$, $p < .001$ NP: $t = 10.61$, $p < .001$)。これらのことから、不登校児と登校児に対する大人の認知的差異は、FCとNPの2尺度が基準になっていることがわかる。

4) いじめっ子と思いやりのある子

大人が認知するいじめっ子のエゴグラムは、CP ($M = 6.51$)、およびFC得点 ($M = 5.79$) が高く、NP ($M = 2.68$)、A ($M = 3.03$)、AC ($M = 3.19$) の各尺度得点は、きわめて低くなっている。こうした結果から、大人は、いじめっ子を、他者や社会に対する批判的、反抗的感情が顕著で、自己中心的・衝動的傾向が強い反面、優しさや客観的認識力に乏しく、

周囲への気づかいにも欠ける存在として認知する傾向にある。

これに対して、思いやりのある児童・生徒は、NP($M=7.30$)とAC($M=6.68$)を頂点に、これにA($M=5.79$)が続くエゴグラム・パターンとなっており、大人は、思いやりのある児童・生徒を、文字通り、保護的・寛容的で、周囲への配慮や客観的認識力に優れる存在として認知する傾向にある。

t 検定の結果、いじめっ子と思いやりのある児童・生徒は、すべての尺度において有意差が認められたが、とりわけ、NP($t=38.09, p<.001$), AC($t=19.01, p<.001$), A($t=17.23, p<.001$)の3尺度において顕著な差異が示された。これらのことから、大人の双方の児童・生徒に対する認知的差異は、優しさや気づかい、客観的認識力の有無を基準にしていることがうかがえる。

2. 児童・生徒行動のイメージの相関

1) ネガティブな児童・生徒行動

大人からみた学業不振児、暴力児、不登校児、いじめっ子の計4つのネガティブな児童・生徒行動間のイメージが、どのような関連性を有しているかを明らかにするために、それぞれのエゴグラムの下位尺度ごとの偏差積相関(r)を算出した(Table 2)。

下位尺度の相関が最も高かったのは、「暴力児×いじめっ子」であった。両者のあいだには、いずれの尺度においても有意な相関が示され、双方の生徒行

動に対する大人の認知傾向にかなりの類似点があることが示唆された。とりわけ、ACの低さ($r=.423$)やCPの高さ($r=.348$), FCの高さ($r=.385$)の面で、双方の生徒行動のイメージに共通点があることが指摘された。

また、これに次いで、下位尺度の相関が高かったのは、「暴力児×学業不振児」であった。双方のあいだには、Aの低さ($r=.246$)やFCの高さ($r=.220$)の点でやや強い相関が認められた。

さらに、「不登校児×学業不振児」では、AとCPの2尺度で、「いじめっ子×学業不振児」では、AとFCの2尺度において、「暴力児×不登校児」では、A尺度でそれぞれ有意な相関が認められた。なお、「不登校児×いじめっ子」では、いずれの尺度間においても有意差は認められなかった。大人は、双方の児童・生徒を異なるイメージとして認知する傾向にある。

ネガティブな児童・生徒行動に対する大人の認知は、全般的に、Aの低さという点で共通性が認められる。

2) ポジティブな児童・生徒行動

ポジティブな児童・生徒行動は、ネガティブな児童・生徒行動と比較して、全般的に、各尺度間の相関が高いのが特徴である(Table 2)。なかでも、各尺度間の相関が高かったのは、「暴力抑制児×思いやりのある子」であった。とりわけ、双方のあいだには、CP, A, FCの3尺度において、高い相関が

Table 2 児童・生徒行動のイメージの尺度間相関

		CP	NP	A	FC	AC
ネ ガ テ ィ ブ な 生 徒 行 動	暴力児×学業不振児	.161*	.210**	.246**	.220**	.190**
	不登校児×学業不振児	.161*	.074	.209**	.107	.134
	いじめっ子×学業不振児	.032	.003	.188**	.175*	.115
	暴力児×不登校児	.065	.052	.172*	.133	.113
	暴力児×いじめっ子	.348**	.273**	.280**	.385**	.423**
	不登校児×いじめっ子	-.125	-.018	.114	.102	.084
ポ ジ テ ィ ブ な 生 徒 行 動	暴力抑制児×学業優秀児	.304**	.204**	.238**	.384**	.156**
	登校児×学業優秀児	.312**	.287**	.324**	.176*	.191**
	思いやりのある子×学業優秀児	.406**	.231**	.263**	.222**	.224**
	暴力抑制児×登校児	.236**	.211**	.175*	.069	.089
	暴力抑制児×思いやりのある子	.456**	.265**	.416**	.328**	.264**
	登校児×思いやりのある子	.461**	.331**	.342**	.245**	.279**

* $p<.05$

** $p<.01$

認められ (CP: $r = .456$, A: $r = .416$, FC: $r = .328$), 大人は, 双方の児童・生徒を, Aに象徴される理性や冷静さに優れ, CPやFCの低さにみられるように, 他者への批判感情や衝動的傾向は, 抑制され気味であると認知する傾向にある。

これに続いて相関が高かったのは, 「登校児×思いやりのある子」であった。双方のあいだには, とりわけ, CPとNP, Aの3尺度において強い相関が示され (CP: $r = .461$, NP: $r = .331$ A: $r = .342$), 双方の児童・生徒に対するイメージは, 他者への批判感情の低さや, 優しさ・冷静さの面で共通性が認められる。

この他, 「暴力抑制児×学業優秀児」では, CPとFCの低さが, 「登校児×学業優秀児」では, CPの低さとAの高さで, 「思いやりのある子×学業優秀児」では, CPの低さの点で, 比較的強い関連が示された。なお, 「暴力抑制児×登校児」の各尺度間の相関は, 一部の低位尺度で若干の相関は認められるものの, 全般的には低い相関にとどまった。

3. 大人の不登校経験・いじめられ経験の有無と児童・生徒イメージ, 自己イメージ

過去における大人の不登校経験の有無と不登校児に対するイメージ, および大人の自己イメージとの関連について検討した (Table 3)。その結果, 不登校経験有群, 経験無群, いずれの場合においても, CP, NP, FCの3尺度の得点において, 大人の自己イメージが不登校イメージを有意に上回った。すなわち, 大人は自らの不登校経験の有無にかかわら

ず, 不登校児が, 自己主張性や優しさ, 自由さの面で, 大人自身より劣ると認知する傾向にあった。

同様に, 大人のいじめられ経験の有無といじめっ子イメージ, および大人の自己イメージとの関連について検討した結果, いじめられ経験有群, 経験無群, いずれの場合においても, CP, NP, A, ACの4尺度の得点において有意差が認められ, CP得点はいじめっ子イメージで, NP, A, AC得点は, 大人の自己イメージでそれぞれ高い傾向にあった (Table 4)。すなわち, 大人は, いじめっ子が批判的感情の面では大人自身より勝ると認知しているのに対して, 優しさや冷静さ, 気配りの面では, 大人自身より劣ると認知する傾向にあった。

考 察

本研究では, 交流分析におけるエゴグラムを手がかりにして, 学業不振児や暴力児, 不登校児やいじめっ子など, 社会的に注目されているネガティブな行動傾向を有する児童・生徒のパーソナリティ特性に対する大人の認知傾向について, ポジティブな行動傾向にある児童・生徒に対する認知との比較の上から検討をおこなった。

まず, 大人は, 学業不振児を, 衝動的で知性や判断力に劣り, 親や教師など周囲の存在に対する配慮の面でも欠けると認知する傾向にあった。これに対して, 大人は, 学業優秀児を, 冷静で知性や批判力が強い反面, 周囲の期待や思いに敏感に反応しやすい存在として認知する傾向にあった。加えて, 不振児の場合には, 全般的に各尺度得点が低く, 逆に,

Table 3 大人の不登校経験の有無と不登校イメージ, 自己イメージの比較

			CP	NP	A	FC	AC
不登校 経験有	不登校	<i>M</i>	3.95	4.39	4.11	4.17	4.88
	イメージ	<i>SD</i>	(2.17)	(1.81)	(1.83)	(2.01)	(2.26)
	自己	<i>M</i>	4.84	5.59	4.42	5.66	4.77
	イメージ	<i>SD</i>	(1.59)	(1.74)	(1.83)	(1.73)	(2.12)
		<i>t</i>	3.057**	4.461**	1.114	5.209**	0.336
不登校 経験無	不登校	<i>M</i>	3.60	4.80	3.90	3.68	5.00
	イメージ	<i>SD</i>	(2.10)	(1.88)	(1.70)	(1.89)	(2.24)
	自己	<i>M</i>	4.65	5.67	4.33	5.63	4.67
	イメージ	<i>SD</i>	(1.81)	(1.71)	(1.73)	(1.45)	(2.07)
		<i>t</i>	4.100**	3.699**	1.886	8.909**	1.147

** $p < .01$

優秀児では、相対的に高いことから、大人は、精神的なエネルギーや活力の面でも、双方の児童・生徒に違いがあると認知する傾向にある。

また、大人は、暴力児を、衝動的傾向や批判的感情が強い反面、知性や他者に対する寛容性、気配りの面で劣る存在であると認知する傾向にある。こうした大人の認知する暴力児のエゴグラム・パターンは、いわゆる新里・水野ら(1986¹⁵⁾)が指摘している「逆N型」にほぼ相当するものであり、ヒステリー性格のパターンときわめて似通っている点で興味深い。

これに対して、暴力抑制児は、FC、CP得点が低く、AC、A、NP得点が高いことから、他者への気づきや配慮に優れ、理性的かつ冷静で、優しさや寛容性をあわせもつ存在として大人から認知される傾向にある。これらのことから、大人は、双方の児童・生徒のパーソナリティ特性をまったく正反対のものとして認知する傾向にある。

なお、大人が認知する暴力抑制児のエゴグラム・パターンは、自ら感情を抑制し、自分よりも他者を立てて行動する傾向が強く、いわゆる新里・水野ら(1986¹⁵⁾)のいうストレスを溜めやすいタイプのエゴグラムと共通している。したがって、暴力抑制児は、概して、真面目で学習への取り組みも熱心であるが、ともすれば、無理をしたり義務感にかられて行動する存在として大人からみられがちな傾向にあるといえよう。

さて、大人の認知する不登校児のエゴグラム・パターンの特徴は、一般的に、各尺度とも得点が4.0

前後に集中しており、凹凸がみられないことである。そうした点では、消極的で自己主張や自主性に乏しい児童・生徒像が浮き彫りにされているといえる。こうした不登校児にみられるエゴグラムは、自身が周囲からどのように見られているかという点に気をつかい過ぎる自意識過剰なタイプの典型であると考えられる。

これに対して、大人が認知する登校児は、一般的に、各尺度得点が高く、FC、NPを中心に、いわゆる「M型」にほぼ近いエゴグラム・パターンとなっている。こうした「M型」は、いわゆる抑鬱的な傾向が強い「W型」とは対極に位置するものである。「M型」は、桂ら(1984⁹⁾)が指摘するNPを頂点とした山型のエゴグラムと同様、健康で明るい自我状態の典型であり、そのことは、とりもなおさず、大人が、元気に明るく登校する児童・生徒を、適応力や柔軟性、協調性を備えた、理想的な生徒像として認知していることを意味するものであろう。

また、大人は、いじめという加害行為に及んだ生徒を、社会や周囲に対する批判的感情が強く、自己中心的で衝動的な傾向が強い反面、NP、A、ACはおしなべて低いと認知する傾向にあった。これらのことから、大人は、いじめっ子を独善的で他者の感情を傷つけやすく、現実認識に欠ける存在としてみていることがわかる。こうした大人の認知するいじめっ子のエゴグラム・パターンは、自己肯定・他者否定の構えを代表するものであると考えられる。

これに対して、思いやりのある子は、養育的・保護的で、周囲への配慮や判断力に優れる存在として

Table 4 大人のいじめられ経験の有無といじめっ子イメージ、自己イメージの比較

			CP	NP	A	FC	AC
いじめられ経験有	いじめっ子	<i>M</i>	6.67	2.87	2.92	5.91	3.07
	イメージ	<i>SD</i>	(1.82)	(1.60)	(1.81)	(1.97)	(2.05)
	自己	<i>M</i>	4.77	5.64	4.43	5.92	4.95
	イメージ	<i>SD</i>	(1.69)	(1.66)	(1.84)	(1.62)	(2.04)
	<i>t</i>		8.090**	12.674**	6.156**	0.047	6.885**
いじめられ経験無	いじめっ子	<i>M</i>	6.31	2.46	3.16	5.64	3.34
	イメージ	<i>SD</i>	(1.94)	(1.25)	(1.66)	(2.11)	(2.21)
	自己	<i>M</i>	4.68	5.64	4.30	5.31	4.42
	イメージ	<i>SD</i>	(1.76)	(1.80)	(1.68)	(1.46)	(2.12)
	<i>t</i>		5.941**	13.909**	4.610**	1.246	3.380**

** $p < .01$

認知される傾向にあった。つまり、他者肯定的なエゴグラム・パターンが浮き彫りにされたといえる。これらのことから、双方の児童・生徒に対する大人の認知は、いたわりや寛容性、他者への配慮、客観的認識力の有無の点で顕著な差異があることが明らかにされたといえる。

また、4つのネガティブな生徒行動間のエゴグラム・パターンの中では、とりわけ、暴力児といじめっ子に対して、大人は、他者の心情理解の欠如や衝動性の高さ、他者批判や攻撃性の強さという点で、双方に共通したイメージを抱えていることがわかる。つまり、大人は、双方の児童・生徒のパーソナリティ特性の基礎には、自己肯定・他者否定的な構えが存在すると認知する傾向にある。これに対して、不登校児といじめっ子間では、大人は、パーソナリティにかなりのずれがあると認知している。

さらに、4つのポジティブな児童・生徒行動に関するエゴグラム・パターンでは、暴力抑制児と思いやりのある子、登校児と思いやりのある子、思いやりのある子と学業優秀児などに対する大人の認知に有意な関連が示された。こうしたことから、大人は、全般的に、ネガティブな生徒行動よりも、むしろポジティブな生徒行動間で、かなり共通した認知傾向を有していることがわかる。

ところで、大人は、大人自身の不登校経験の有無にかかわらず、不登校児が、自己主張や思いやり、自由さ・楽観性の面で、大人自身よりも劣ると認知する傾向にある。また、大人は、大人自身のいじめられ経験の有無にかかわらず、いじめっ子が批判的感情の面では大人自身より強いと認知しているのに対して、優しさや冷静さ、他者への気配りの面では、大人自身よりも劣ると認知する傾向にある。こうした一連の結果は、一面では、大人自身の自己びいきの習性や自らの優位性を維持しようとする自己防衛機制のあらわれであるとみることもできよう。

以上、児童・生徒のパーソナリティ特性に対する大人の認知傾向について、若干の考察を試みたが、本研究結果が示唆しているように、学業不振や不登校、いじめ、暴力など、社会からの関心が高い行動傾向にある児童・生徒は、概して、大人からネガティブな評価を下される傾向が強い。つまり、そこには、これらの児童・生徒の短所が「凶」として認知され、長所が「地」として背後に退けられるという

否定性効果ははたらきやすい。学校へ通えない、学習が不得手である、反抗的であるという表層的な行動や態度だけで、大人は、とすれば、児童・生徒のパーソナリティに対する固定的観念を形成しやすい向きがある。

家庭や学校、社会という教育環境を、信頼関係に裏打ちされた場にしていく上で何よりも大切なことは、まず、大人自らが、こうした児童・生徒行動に対するステレオタイプの認知傾向に目を向け、自身への気づきを深めていくことであろう。そのことは、既に、鉤(1997¹⁰)が示唆しているように、大人の既存の考え方や枠組みで児童・生徒を価値判断し、評価を下すことに対して、大人自身に内省を迫るということでもある。児童・生徒の成長発達を適切に援助し、支えていくための第一歩は、児童・生徒にとって重要他者である大人自らが、こうした自己点検を怠らないことにあるといえよう。

文 献

- 1) Coolidge, J. C. A ten-year follow-up study of sixty-six school phobic children. *Am. J. of Orthopsychiatry*, 1964, **34**, 675-684.
- 2) Eysenck, H. J. and Cookson, D. Personality in primary school children. 1. Ability and achievement. *Brit. J. Educ. Psychol.* **38**, 1969, 67-80.
- 3) 藤田 勉・川島 真 幼児教育学科における推薦選抜の研究 応用心理学研究, 1995, **20**, 49-54.
- 4) 平井信義 登校拒否の発生機序について 現代のエスプリ, 1978, 59-65.
- 5) 桂 戴作・杉田峰康・白井幸子 交流分析入門 チーム医療, 1984, 1-47.
- 6) 鉤 治雄・岡林春雄 学業不振児の心理的要因 指導と評価, 1979, **25** (8), 64-67.
- 7) 鉤 治雄 高学児における教育心理的要因 追手門学院大学教育研究所紀要, 1981, **1**, 31-50.
- 8) 鉤 治雄 現代中学生の家庭内暴力傾向に関する調査研究 青少年問題, 1984, **32** (1), 26-33.
- 9) 鉤 治雄 現代中学生の家庭内暴力傾向 少年補導, 1985, **30** (2), 34-40.
- 10) 鉤 治雄 教育環境としての教師 北大路書房, 1997, 175.
- 11) 文部省 登校拒否児童生徒に関する調査結果, 1993, 8-9
- 12) Olweus, D. *Bullying at school*. Oxford: Blackwell Publishers, 1993, 34-36.
- 13) Reid, K. Differences between the perception of per-

- sistent school absentees towards parent and teachers. *Educational studies*, 1983, **9** (3), 211-219.
- 14) Savage, R. D. Personality factors and academic attainment in junior school children. *Brit. J. Educ. Psychol.*, **35**, 1966, 91-92.
- 15) 新里里春・水野正憲・桂 戴作・杉田峰康 交流分析とエゴグラム チーム医療, 1986, 57-83.
- 16) 白井利明 登校拒否児に対する青年・大人・教師の認知の違い 教育心理学研究, 1992, **40**, 1-9
- 17) 田畑 治 いじめっ子にみられる親子関係 教育心理, 1981, **29** (2), 28-31.
- 18) 詫摩武俊 登校拒否児の性格特性 詫摩武俊・稲村博(編) 登校拒否 有斐閣, 1980, 63-73.
(受付: 1997.10.11, 受理: 1998.5.2)
-